

## 未来を描きつつ 先に見える支援を

陸前高田市での支援活動（第三報）



日本赤十字秋田看護大学  
佐々木亮平

(ささき・りょうへい) 看護学部 助教

連絡先

〒010-1493  
秋田県秋田市  
上北手猿田字苗代沢 17-3  
018-829-4125  
ryohei-s@rcakita.ac.jp

### I はじめに

岩手県陸前高田市（以下、市内または現地）における「東日本大震災支援レポート」も3回目となりました。今回は平成23年5月11日以降、現在（6月13日）までの約1カ月間の状況をご報告いたします。

震災直後は雪が降っていましたが、現地でも桜が咲き、新緑が芽生え、現在では初夏を思わせる陽気が続いており、3カ月という時間がたったことを季節の移ろいから感じます。その半面、何かがあの日（3月11日）を境に止まってしまったような感覚を持っていることも事実です。いまだに見つからない私の元同僚も多数おります。それでも私自身はこれまで14週連続で現地に入らせていただき、毎週訪れるたびにがれき（本当はがれきとは呼べません。一つひとつが思い出深い大切なもの

と思います）が片付けられていく風景を目の当たりにすると、少しずつですが着実に進んでいるということを実感できます。

※6月1日現在の市内がれき量の回収率は、全96万トン中、23万7000トン  
＝約24%

保健医療福祉関連分野についても、これまで延5000人（医療チームを除いた速報値）を超える全国からの支援チームの皆さまのおかげで、まさしく復旧から復興へ向け、一歩ずつ進んでおり、現在は避難所中心の生活から仮設住宅への移行期という新しいステップに入っております。

### II 生活の場は「避難所」から「仮設住宅」へ

23年6月12日（被災から93日目）現在の死者は1513人、行方不明者は625人となっており、先月以降さらに1000人を超える方々の安否が明らか

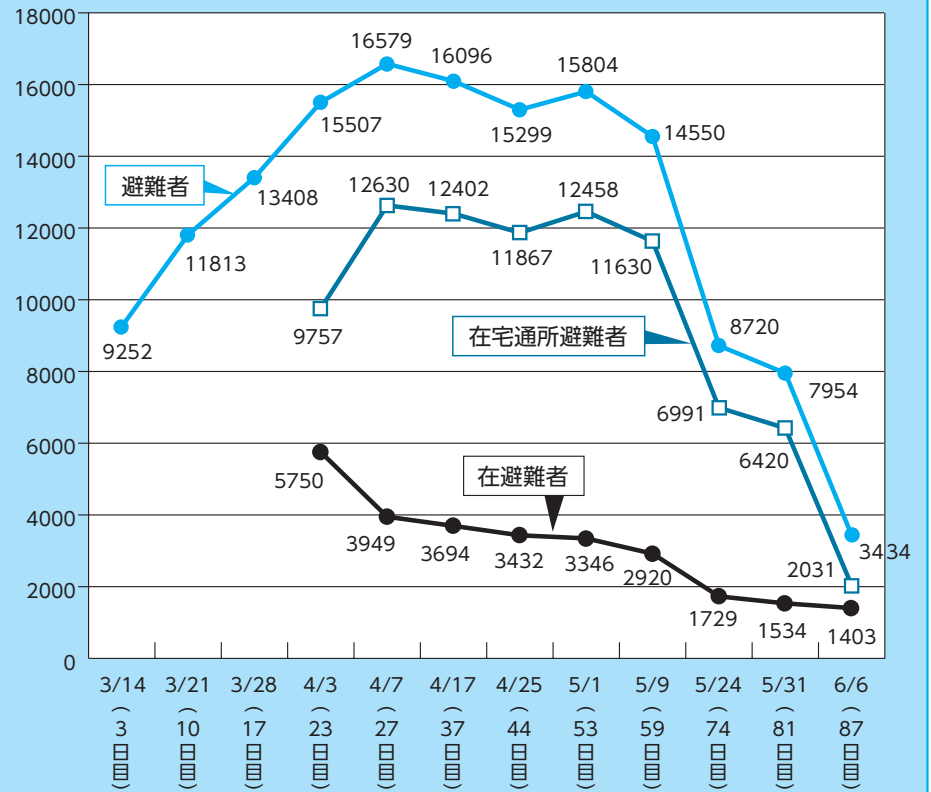
かになりましたが、日を追うごとに行方不明者の捜索は難航してきています。さらに、そのことによる各種手続きが滞るなど、残された家族の皆さんの負担も二重三重となり、引き続き生活全般のサポートが必要となっています。

市内避難者数推移（図1）は、仮設住宅の建設着工・入居に合わせて5月下旬ごろから一気に減少し、6月6日現在で避難者が生活をしている避難所は36カ所1403人と、ピーク時（90カ所5750人）の3分の1から4分の1にまで減ってきています。このうち、避難者が50人を超える避難所は7カ所となっています。なお、6月4日現在の仮設住宅の進捗状況は2072戸が着工済みで、6月中には全体の約61%の仮設住宅で入居が予定されます。しかし、現在の建設予定戸数は5月6日に申し込みを終了した内容となっており、その後、辞退者や入居の

問い合わせも続いていることから、追加募集が行われる予定です。

このように被災者の生活の場は、3カ月が経過してようやく、避難所から仮設住宅へ移ろうとしています。規模や程度が異なるとはいえ、阪神・淡路大震災や新潟県中越沖地震と比しても、その進み具合はさまざまな理由により緩やかであるため、引き続き、息の長い支援が必要であると考えます。実際、現在の保健師チームは、後述する全戸調査を5月いっぱいまで終え、仮設住宅入居者の家庭訪問を開始しています。これは、入居後1、2週間を目途に訪問しているもので、同じく後述する要フォロー者と並行で実施していきます。仮設住宅にすべての方が入居を終えるのは7月末を予定していることから、全国からの支援チームの継続した応援が最低でも8月の中旬からお益明けくらいまでなければ、現地では非常に厳しい活動スケジュールを余儀な

図1 陸前高田市避難者数推移



続いて支援を必要とする方々を関係機関につなげるとともに、陸前高田市の保健医療福祉にかかる復興計画立案の基礎資料とすることです。避難所別の実態や地区別の状況を明らかにすることで、次の具体的な対策につなげられると考え進めてきました。

その中で一つ、当たり前のようには考えていたことが、実はそうではないと気づかされることがありました。それは、私たちはいつの間にか「避難＝避難所」という認識を持ってしまいがちですが、「避難＝個人宅」という方々も実際には約20%もおられるということです。約2カ月間かけての調査でしたので、現在は必ずしもこれだけの割合の方が個人宅に避難されているわけではないと思いますが、この地域の絆の強さを表している数値だと感じました。もっとも、避難所そのものが流失してしまつた地区も多数ありますので一概にはいえることはできず（一次避難

所68カ所中35カ所が浸水または流出）、避難所そのものが機能しなくなる津波という災害の特徴といえるかもしれません。過去の震災や今回の他地域の状況がどのようになっていくかは確認していきませんが、被災者支援をするにあたり忘れてはいけない視点だと思っていました。

#### IV 短期支援保健師チームのつよみ（このころのケア）

#### ◆継続支援が必要と思われる対象者の選定基準

- ・65歳以上のひとり暮らし高齢者
- ・75歳以上の高齢者のみの世帯（健康上問題のある事例では、歳年齢に到達していても要支援としても可）
- ・治療放置や治療中断等の高血圧・糖尿病等生活習慣病患者
- ・一人親世帯（母子・父子）
- ・乳幼児を抱え、育児不安のある親・祖父母等
- ・コントロール困難なアレルギー患者
- ・心のケアの必要な対象者
  - 肉親を亡くした単身生活者（特に男性）
  - 震災孤児やその家族
  - 不眠・不安・不定愁訴や心身症状のある人等

#### III 忘れちゃいけない 個人宅避難者の存在

くされることが予想されます。

前回もご紹介しました「健康・生活調査」は、市内全世帯を対象に4月6日から5月いっぱいまでをかけて、全国からの保健師チームの皆さまにご協力いただき実施しました。結果、約85%の人口をカバーするまで進めることができました。ほぼ市内全域を表す貴重なデータで、本入力は終了し、岩手医科大学歯学部口腔保健育成学講座の相澤文恵助教、ポストン大学公衆衛生大学院の斎藤浩輝先生の緊急集計・分析結果は6月6日の第9回陸前高田市保健医療福祉包括ケア会議で報告されました。

この調査目的は、「調査Ⅱケア提供（支援）」の一環として位置づけ、市民を対象に現在の健康や生活の状況を確認し、緊急性の高い要支援者や、継

表1 陸前高田市継続支援対象者一覧表

		1	2		3	4	5	6	7	8	計
		65歳以上 独居	75歳以上 のみ		生活習慣病 他	一人親	育児不安	アレルギー	こころのケア 他	その他	
人数	世帯数										
1	広田町	84	64	32	13	20	0	0	39	96	316
2	矢作町	87	105	51	10	12	0	0	20	7	241
3	高田町	165	124	60	72	43	0	1	87	0	492
4	米崎町	52	50	25	21	16	0	1	40	0	180
5	気仙町	22	26	9	15	0	3	0	28	5	99
6	竹駒町	33	60	35	32	10	0	4	29	33	201
7	横田町	48	71	33	9	6	0	0	17	4	155
8	小友町	36	67	33	64	9	1	0	53	0	230
9	計	527	567	278	236	116	4	6	313	145	1914

象者を支え続けることができます。

実際、市内各地区を受け持っていたのだいたのですが、同じチーム内で地区踏査をしながらメンバーが代わっても統一した支援が展開できるよう、それぞれで工夫されていきました。被災者から見ても、多くが全国の各自治体からの派遣であること、そして保健師であることで信頼感を得やすく、極端な言い方をすれば、もう二度と会わないがゆえに、いろいろと話すことができ、結果としてこころのケアにもつながるという部分もあるように感じています。

速報値ですが、4月は延3000人を超える保健関連チームが現地支援に入っており（1日平均102人）、このうち保健師は最も多い約25%を占めています。これだけのマンパワーを送り続けるということは、保健師に限らず各組織の体制にも影響を与えかねず、実際、相当影響が出ているこ

とだろうと推察されます。5月も延1500人を超えるチームが継続して入っており（1日平均49人）、派遣チーム数は減りましたが、保健師の割合は約36%と増えていることから、今後も長期戦が必至となっている今回の災害支援活動において、保健師に期待される役割は非常に大きいと思います。

## V 未来が見えること

こころのケアに関連して、保健師チームの皆さまには個別支援と並行し、それぞれの受け持ち地区に関する地域コミュニケーションづくりも進めていただいております。私が申し上げるまでもなく、いずれ、各種支援チームの皆さまは収束し、撤退していくわけですから、こころのケアも含めて地域内における住民同士の力で展開していきという姿が一つの目標になってきま

ております。その結果、さらに継続が必要な対象者については要援護者台帳を作成し、確実に今後も支援を継続できる態勢を構築していただいております。

私はこれまで、比較的短期で交代される支援チームの皆さまに否定的な思いをどこかに持っていたかもしれせん。しかし、4月からの全戸調査をはじめ、現在の要援護者や仮設住宅入居者の支援にあたっては短期支援だからこそある良さ、つよみ（アセット || assets）があると感じるようになってきました。これだけ大規模で甚大な被害をもたらした災害ですので、被災者の支援、これから重要となってくるこころのケアといっても、そう簡単には進められないことばかりですが、保健師は自らアウトリーチ（訪問）し、生活全般をアシメントできる職種であり、短期間の支援であっても引き継ぎ体制がしっかりすれば、専門職としてしっかり対

震災直後から、「支援に入るにあたり、現地にはどんな支援が必要でしょうか」という「質問をよく受けました。私が思ったことは、「先が見える支援」です。もちろん、震災直後はさまざまな物資が最優先ではありましたが、どうなるか分からないから不安が生じ、いつまで、どのように頑張ればいいのかも分からないために苛立ち、そして疲労だけが蓄積されていくような気がしました。目標なり目的なりやるべき先が見えて、時間軸を持ってそれを具体的に考えることができれば、自分自身の人生にも初めて未来が見えるようになるのではないかと感じています。頑張る度合いも分かり、休むこともできるようになります。

これは言い過ぎかもしれませんが、「がんばろう」や「負けない」というメッセージは具体的な可能性まではイメージできないため、やはりもう一歩踏み込んだメッセージを市民の皆さんと

もに考えていくことが重要だと思いま  
す。

## VI キーワードは「居場所」

発災から3カ月がたち、医療も各  
チームが撤退し始めています。日本赤  
十字社を除く市内各地区救護所の受診  
者数も10〜20人台/日と、ピーク時の  
半数近くに落ち着いてきています。市  
内基幹病院である県立高田病院は7月  
1日から保険診療を開始し、7月中旬  
から下旬ごろを目標に仮設病院をス  
タートできるよう準備を進めていま  
す。

今後、市内の救護所が収束されてい  
き、震災前に近い状態の医療体制を再  
建するにあたり、もしくは以前よりも  
充実した医療体制を再構築するため  
に、県立高田病院の石木幹人院長をは  
じめ病院スタッフの皆さまと陸前高田  
市が協働で、医療懇談会を6月13日か

福祉に関連する各チームが一堂に会  
し、現在までの活動報告と今後の方向  
性を共有し合う包括ケア会議を開催し  
てきたところです。

しかしこれも、参加者数の増加に伴  
い肥大化し、率直な意見交換が難しく  
なってきました。各種支援チームから  
の意見を蓄積しながら、公衆衛生ねつ  
と内の「陸前高田市のいま」<sup>1)</sup>で包括  
ケア会議でのPowerPoint資料も含め  
情報発信しているところですが、限定  
的となっているのも事実です。

これまでは、とにかくお互いの活動  
を共有することに重きを置き、私自身、  
情報のハブ化を目指して進めてきまし  
たが、そろそろ次のステップとなる時  
期にきたように感じています。

ここからが本当の意味でのマネジメ  
ント能力、調整能力を求められるので、  
引き続き、皆さまとともに考えながら  
進めて参りたいと思います。よろしく  
お願いいたします。

ら始めています。1回目は、市内最大  
の避難所である市立第一中学校で開か  
れ、救護所が撤収していったときどう  
するか、今後の市内の入院体制も含め  
た医療の姿はどうあるべきか等、避難  
されている方々同士で意見交換をし  
ました。これまでどおり市内で入院でき  
る病院があると良い、仮設住宅の近く  
にバス停があつて、病院にバスで行け  
ると良い、新しい病院は市役所と一緒  
に高台に建設し建物の中に市民が憩い  
の場として使えるスペースがあると良  
い、などなど、単なる要望ではなく、  
関係者と市民の枠を超えて話し合おう  
とする姿が印象的でした。

未来を描くため、前回もご紹介した  
「陸前高田市保健医療福祉未来図（復  
興計画）<sup>1)</sup>たいてちよう台」<sup>1)</sup>を  
公益社団法人地域医療振興協会ヘルス  
プロモーション研究センター長の岩室  
紳也先生の全面的なバックアップのも  
と作成を進めています。文字どおり、

たたき台として、支援チームだけでな  
く、今後は市民の皆さまの声をいただ  
きながら進めていくものです。

現在、一番新しいバージョンは、キー  
ワードを「居場所」とし、まさしく、  
石木院長が実践されている形で、市民  
の皆さまの声で創り上げているところ  
です。その際、**図2**にあるような絵と  
簡単な言葉でイメージしやすいよう工  
夫をし、各ライフステージに合わせた  
居場所の未来図を描き出していく予定  
です。この内容は、陸前高田市の復  
興計画に反映されていけるよう調整を  
行っているところです。

## VI 情報のハブ化から 次のステップへ

現地では支援チーム同士や支援チー  
ムと地元関係機関等との間における調  
整が複雑化していることを前回もご報  
告させていただきました。その課題解  
決のために、2週間に1回、保健医療

図2 陸前高田市保健医療福祉未来図（抜粋）



文献・インターネットサイト

1) 公衆衛生ねっと (<http://www.koshu-eisei.net/>) 内「陸前高田市のいま」<http://www.koshu-eisei.net/saigai/rikuzentakada.html>